Osaka University Knowledge Archive

Title	<書評>NINETEENTH CENTRY ORNAMENTED TYPEFACES BY NICOLETE GRAY FABER AND FABER LIMITED LONDON 1976
Author(s)	鈴木, 佳子
Citation	デザイン理論. 1981, 20, p. 135-137
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52676
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

書　評

NINETEENTH CENTURY ORNAMENTED TYPEFACES

BY NICOLETE GRAY
FABER AND FABER LIMITED
LONDON 1976

本書は1938年《XIX th Century Ornamented types & title pages'》の改訂版で，初版につゞいて1951年再版され，改訂版ではタイトルも少し変えて出版された。19世紀のタイプフェイスの中でも特に装飾活字書体について記されていて，大変興味深いものである。

19世紀は幾多の活字が開発されているが，装飾活字の氾濫とまでいわれた時代で，その数もあまりに多く私たちがそれを見るといつの時代のものか，どこの国で主に使用されていたのか判別に困ることが多い。

このニコレット・グレイの本はそのような疑問に答えてくれるだけでなく，日常あまり見かけない活字も資料として与えてくれた。

1800年～1900年までの 100年間を８章に分けて書いている。９章には別に「アメリカの装飾活字書体」についてレイ・ナッシュの論文を10章にはレイアウトについて記している。

第１章　1800年～1815年

18世紀の中頃まではオールド・フェイスの時代でバスカービルやジョン・ベル（1788～1800）の書体が優勢であったが，18世紀の末になりフランスやイタリアのモダン・フェイスの出現によって急にいろいろの書体が生れることになる。

そのきっかけは特にボドニーとディドーによるところが大きく，そのモダン・フェイスから，さらに太い細いのコントラストを強くしたのがファット・フェイスで，19世紀の初めイギリスを中心に多く用いられるようになった。

ファット・フェイスを特にデザインした人というのは見あたらない。

本書では初期のものとしてフライのTwelve Lines Pica 1788を取り上げている。

（ファット・フェイスというのは書体の高さの⅙ぐらいのステムの巾が¼～⅓になったも

のfat·face (1:3+)or (1:2½canon)　太い細いのコントラストの強い書体をいう。

その他ブラック体においてもコントラストの強い書体となる。

例　Figgins 1815/17　German Text

Caslon 1821　　Black NO. 1 etc

第２章　1815年～1832年

この期はエジプシャン体の発明の時代とされ1815年以前から今日でいうエジプシャン体が使用されてはいたが，活字としてはアンティックの名称でフィギンスのものが一番早い，しかしエジプシャンという名称はロバート・ソーンということになっている。（スクェア・セリフで重々しい感じがする）

エジプシャン体にもいろいろあるが，ソローグッドの1821年の書体，カスロン1825年の書体などが紹介されている。

同じ時期のもう一つの書体はシャドウ体で最初のものはやはりフィギンス（1815）のものでソローグッド（1921）ブラック・ガーネット（1919）等がある。その他装飾をステムの中に入れ込んだもの黒地に白ヌキの文字などもてはやされたようである。

第３章　1832年～1838年

1830年代はタイポグラフィ史上最も20世紀に影響するサンセリフ体が出現する。

1816年すでにウイリアム・カスロンⅣのサンセリフ体（サンセリフとはいわずにエジプシャンという名称で）があり，ブラック・ガーネットの1819年にもあるが，1830年のフィギンスの活字見本帖にサンセリフという名称で現われた。初めは大文字のみである。（ソローグッド1834，グロテスクも同じくサンセリフ体）

サンセリフ体というのは文字通りセリフを取った書体の意でセリフの無い文字ということだが，装飾の多い時代の一つの変り目といえる。そのサンセリフと並んでオーナメントの多い書体がこの時期をうめつくす。

第４章　1838年～1848年

この時期は初期ヴィクトリア時代として産業の発達にともなう商業活動が活発になり，19世紀に入って開発された書体がなお新奇を求めて装飾が多くなる。

また一方で，丸ゴシック体やタスカン体，グレシャン体，パースペクティヴな書体が次々に出現する。

第５章　1848年～1865年

グレイは1850年前後を第２革命の時期というヴィクトリア時代の最盛期で1851年の万国博をはさんで活気に満ちた時代である。その時期を反映して、前期からのゴシック・リバイバルがつゞき，ものすごいまでの装飾過多の活字書体が開発されている。

(The best Victorian Faceとして
Ornamented, Marr. C 1853が上げられている)

その同時期に一方では機能主義が問題にされる一面もある。

第6章　1865年～1880年

開発活字の小休止の時代，それまでに現出したスタイルを洗練させている時代で全体として細身になり精密になった。

New Semi Ornamental types
(Latin-Runic style-family)

第7章　1880年～1892年

前期に比べて新書体が多く出現し活況を呈するがおもにアメリカで開発された書体である。

また変ったところではジャポニズムの書体があることだ，1885年のReedのJapanese, 1887年のMiller & Richardの〝ミカド〟や〝ホクサイ〟等日本，中国，エジプトなどの名称のついた書体が多く開発される。私たちから見ると大変変な書体である。

第8章　1892年～1900年

19世紀のタイプフェイスは商業的なものの出版に始まりしかも発達した，その書体は引きつゞき，ベーシックカテゴリーのもの，モダン・フェイス，オールドスタイル，サンセリフとこれらのミックスしたものと多様ではあるが，この時期にいたり商業主義以外のもの特に書籍のための書体とデザインが栄んになった。ことにウィリアム・モリスのケルムスコット・プレス1891のことやいろいろのプライベート・プレスのことに言いおよんでいる。

第9章　Ray Nashのレポートでアメリカの装飾活字書体を記す。

第10章　タイポグラフィカル・レイアウトについて。

その他補足としてトスカン体について記しているし，また1800～1900年の装飾活字書体の一覧表などついていて活字に興味ある人にはおもしろい本になっている。

全体を眺めてずいぶん19世紀の装飾活字書体の多いのにおどろくと共にイギリス，フランス，イタリア，ドイツと少しづつ名称の異るもの使用される頻度の違いなどはあるが，やはりイギリスの資料だけあってアメリカをも含む欧文書体圏での書体をうまく分類してあると思った。たゞし表題の通り装飾活字の分野のみに限られているため，私たちの通常ふれることの多い，ボディ・タイプになるような書体は集録されていない。それらの書体も同時に論じられている本を参考にすると私たちには大変わかりやすい。例えば

By FRANTIŠEK MUZIKAの〝Die Schöne Schrift〟PRAGUE Ⅰ, Ⅱ, 1965 などこの本の日本での紹介は〝グラフック・デザイン〟誌に田中正明氏が書かれている。

(1981. 8. 鈴木佳子)